Tokyo Gakugei University Repository
東京学芸大学リポジトリ
http://ir.u-gakugei.ac.jp/

Title	「戦争の授業」における発問化の視点 : サイパン攻防戦をめぐって(fulltext)
Author(s)	平田,博嗣
Citation	研究紀要/東京学芸大学附属小金井中学校(48): 41-48
Issue Date	2012-03-30
URL	http://hdl.handle.net/2309/130430
Publisher	
Rights	

「戦争の授業」における発問化の視点

～サイパン攻防戦をめぐって～

社会科　　平田　博嗣

サイパンは、グアムと並ぶ日本から最も近いアメリカであり、南洋のリゾートである。しかし、サイパンとグアムの歴史を見ると、両島は近くでありながら、全く違った歩みをしてきたことがわかる。サイパンの近代の開発は、日本の民間人によるものが非常に大きい。そして太平洋戦争の激戦地となる。歴史教育の重要な学習目標・内容である「戦争の授業」について中学生に考えさせることができる。なぜ戦い、なぜ降伏しないのか、日本の戦前・戦中の精神構造を具体的に言葉で感じる教材となる。

〔キーワード〕　サイパン　太平洋戦争　集団自決　戦陣訓

Ⅰ．なぜサイパンなのか

サイパンには、他の南太平洋のビーチと異なるものがある。それは焼けこげ、朽ち果てた戦車や飛行機、高射砲の残骸であり、それは白い砂浜や浜辺を貫く街路、遠浅の珊瑚礁の海の中に点在しているのである。太平洋戦争のことを思い出さずにはいられない場所なのである。現在もビーチなどに残る戦跡は、多くのことを無言で語りかけてくる。

「戦争の授業」は、生徒たちにとって年々遠いものとなり、風化していくことが懸念されている。その意味では、サイパンには、今もその傷痕が残されていることは、生徒にとっては、実物に接しられる貴重な場所でもある。戦車に残る銃弾の跡は、撃つ側よりも撃たれた側の心理を想起させる。戦争の学習をしていて、不安になるのが、生徒たちは常に攻撃する側として、戦争を見がちであるということである。特に湾岸戦争後の学習では、アメリカの攻撃機からの映像などを見ると、まるでゲームをしている感覚になることが多いとの指摘がなされている。攻撃する側がいるということは、されている側が存在し、悲劇はそこに存在する。これがサイパンを学習する意義の第１の理由である。

第２の理由は、サイパンは日本人にとって、他の太平洋の島々より、その存在が大きかったことにある。サイパンは、「南洋の満州」と呼ばれ、日本人の移民が大量に移り住んだ場所である。その数は29,000人である。日本の移民の歴史は、江戸時代末期のオーストラリアへの移民、ハワイへの移民に始まり、アメリカ本土、ブラジルを始め南米、そして満州の移民と続いた。現在はグアム・サイパンと一緒に並んで言われることが多いが、グアムはアメリカ領であったのに対して、サイパンは日本人によって開発された面が多いのである。その事は現在の両島の文化や生活の様子の中にも伺い知ることができる。サイパンでは、戦前には、まさに日本の生活や文化が花開いていた。サイパンを学習することは、日本の戦前・戦中の民間人の意識を学ぶ好例となりうるのである。

第３の理由は、生徒にとって戦争の学習が、事実の羅列では意味がない、知識の習得だけで終わってはならない学習内容である。戦争について真摯に向き合い、人間が人間を殺し合うという人間としての行動の仕方・生き方に迫らなければならない。なぜ戦争をするのか、続けるのか、終われないのか。そしてなぜ日本兵は最後に降伏してきたのか。民間人をも巻き込んだサイパン攻防戦から見える日本の玉砕の論理とアメリカ兵の心理が、見えてくる。知識だけでなく「戦争とは何か」と戦争の本質を問うものとなる。戦争は兵対兵の戦いから、民間人をも巻き込んでいった。サイパン攻防戦は、日本の民間人の死亡率だけを見れば、沖縄戦を上回る。さらにサイパンは日本の悲劇の舞台であるとともに、アメリカ軍にとっても、被害は甚大で、投入した兵に対する死傷者の割合は、ガダルカナルでの２倍であった。上陸した兵員71,034名の内3,400名が戦死したのであり、負傷者行方不明者は13,100名を数えた。(1)後に続く硫黄島、沖

縄の激戦にも、サイパンの戦いが反映されている。アメリカにとっても忘れがたい傷痕であり、メモリアルパークはそのためのものである。

以上からサイパン攻防戦の学習の意義は大きいと考え、サイパンの教材化に取り組んだ。

Ⅱ．サイパンの歴史

北マリアナ諸島の先住民はチャモロ人で、紀元前1500年から暮らしていたと考えられる。コメを作り、カヌーで大洋を往来していた。

1521年、世界一周を目指したマゼランが、マリアナ諸島を発見し、1565年、スペインはマリアナ諸島を植民地として一方的に宣言した。マリアナとは、当時のスペインの皇后マリアナの名から取られたものだ。スペイン人はキリスト教を強要し、チャモロ人と対立した。この戦いは、銃や火薬という文明の利器を使用するスペインと棍棒を振り回す先住民チャモロ人との戦いで、スペイン人の圧倒的勝利となるが、19世紀までの長期に渡るものであった。チャモロ人は９万人の人口が５千人以下に激減し、チャモロの文化も失われた。1815年には、カロリン諸島から多くの人々の移住が行われ、カロリアナ人と呼ばれるようになった。長くスペインの統治が続いたので、サイパン島には、スペイン語の名残りが地名などに見られる。サンホセ、サンアントニオなどである。

スペイン植民地時代が終わったのは、1899年のことである。前年1898年のスペインとアメリカとの米西戦争で、スペインの敗北により、翌年プエルトリコ、フィリピン、グアムはアメリカに割譲され、マリナア諸島・カロリン諸島はドイツに売却され、サイパン島はドイツ人のものとなった。

ところが、ドイツの支配は長くは続かなかった。1914年第１次世界大戦が勃発し、日本は日英同盟の関係から連合国として参戦し、ドイツの敵国となった。サイパンを始め太平洋の島々に、ほとんど軍事力らしきものを有していなかったドイツは、日本軍により短期のうちに駆逐され、サンパン島は日本軍に占領された。そして1919年ベルサイユ条約で、正式に日本はサイパンを始め南洋諸島を、日本の委任統治領としたのだ。日本による統治は、スペインやドイツと根本的に違っていた。スペインやドイツは、サイパン島を領土として所有しても、そこで産業を興すことなどの考えはなく、先住民は奴隷としてヨーロッパ人の言いなりになればよかった。しかし日本は、ここにサトウキビの生産などの産業を植えつけた。第１次世界大戦で、ヨーロッパの農業、特にビートの生産が激減したので、砂糖の価格が暴騰したこともあり、製糖工場を作ることとなるである。

野村進著『日本領サイパンの一万日』には、当時の日本人とサイパンの様子が詳しく記されている。その中の中心人物は、山口百次郎で、サイパンに移り住んだ日本人の最初の方の人にあたる。百次郎は、日本本土で食いつなげなく、島々を南下し小笠原からたどり着いた人である。百次郎は商魂たくましく、自身の商売を大きく展開し、財産を築いた。彼の作った旅館は「彩帆閣」と名付けるなどした。(2)サイパン一番の繁華街ガラパンには、日本の商店が並び、日本の商品が売られていた。日本の生活と文化が、サイパンの地に浸透していったのであった。自転車を例にすると、1925年に全島で76台であった数は、1931年には1832台、1937年には4968台(3)と急増した。精神的なよりどころとしては、1914年10月軍艦香取によって、ドイツ領であったサイパンを占領したことにちなんで、千葉香取神社より御神体を奉祀し、香取神社を建立し、現在もその地にある。また軍艦香取の探照灯を境内にそなえ付けたこと(4)など、この地を祖国日本になぞらえようと夢見たことがわかる。 サイパンの開発は、当初は民間主導であったが、1937年日中戦争勃発より、官主導に移っていった。サイパン公学校では、下の様な言葉を毎朝児童・生徒に唱和させ、神国日本となっていった。

１．聖寿ノ万歳ト国運ノ隆昌ヲイノリマス。

２．私共ノタメニ命ヲステテ下サイマシテ有難ウゴザイマス。

３．怪我ヤ病気ノ兵隊サンガドウカ早クナオッテ下サイ。

４．今支那デ働イテイル兵隊サンドウカ支那ノ弾丸ニアタラナイヨウニシテ下サイ。

（『南洋庁サイパン公学校・学校便覧』）

さらにサイパン尋常小学校では、1935年12月天皇・皇后「御真影」が奉安所に納められた。1933年開校のサイパン実業学校の教頭は学生５人を引率して、東京に来て1939年５月の天皇親閲式に参加、皇居前広場を日本全国の代表32,500人の学生と共に、行進を行った。(5)教育は日本人子弟と同じように先住民にも施した。優秀なチャモロ人の若者は、日本本土にまで行かせて教育した。もちろん植民地支配であるので、日本人と先住民との間には、相応の差別が存在していたとしても、ヨーロッパ人との処遇の違いは歴然で、日本人がサイパンの現地の人々に対しての対処の仕方は、その後のサイパンの文化にも影響した。

Ⅲ．サイパンにおける太平洋戦争

現在の視点から考えると、太平洋戦争おいて日本の無謀さはよくわかる。1941年12月に始まる太平洋戦争では、日本は工業力（国力）が10倍にも及ぶアメリカとの戦争を、緒戦の勝利で勢いづけて終わろうとしたことは、所詮無理があり、不可能であった。統計資料(6)などを見ると明白な事実であった。

ではサイパンでは、どのように戦争を見ていたのであろうか。大本営発表を鵜呑みにした多くの民間人であっても、1943年２月１日ガダルカナル撤退で、サイパンに立ち寄った日本兵については、「骨と皮に痩せこけ目玉ばかりがぎょろぎょろと光らせていた。」(7)との記述のとおり、大本営の「転進」との報道とは、違っていたことは気付いていたが、それは口に出せない社会となっていた。

戦況は日本にとってどんどん悪化し、アメリカ軍の南からの北上を、間近に意識するようになった1943年９月30日「帝国戦争目的達成上絶対確保ヲ要スル圏域」が発表され、サイパンはこれに該当し、ここに本土防衛の最前線と位置付けられた。重要拠点となったサイパンでは、軍も民も挙って島を死守する空気が高まった。そして、それは日本本土、大本営でも同じであろうとサイパン在住の民間人は考えた。よって圧倒的な戦力で上陸してきたアメリカ軍に対して、連合艦隊が必ずたすけに来るという考えを強く持つに至ったのも不思議ではないかもしれない。ところがその頼みの連合艦隊は、マリアナ沖（フィリピン海）海戦で大敗北を喫し、サイパン死守は断念され、見捨てられた形となっていった。しかし現地サイパンには知らされず、1944年６月29日に日本の連合艦隊が着くとの情報を信じた。そこまで持てば、助かると思い込んで戦っていたのだ。

日本の守備隊は、アメリカ軍の圧倒的な数の兵、火力になすすべもなく、敗退を重ね、水際作戦から奥地のジャングル戦に後退していった。海からの艦砲射撃で地形は変わり、空からの爆弾と機銃掃射、陸上では、戦車や火炎放射器による掃討作戦で、日本兵のみならず、民間人までも森の中に逃げていった。アメリカ軍に捕まると、男は拷問の上で殺され、女が乱暴の上殺されると教育されていたことが、民間人までも逃げていく状況を作りだしていた。ここにおいて７月６日南雲忠一、斎藤義次ら陸海軍の最高指導者は、サイパン島を死守することを断念、全軍に玉砕の指令を出し、自分たちは自決していった。最後の訓示は、以下の通りであった。

「『サイパン』島ノ皇軍将校ニ告グ」

「今ヤ止マルモ死、進ムモ死、生死須ラクソノ時ヲ得テ帝国男児ノ真骨頂アリ。今米軍ニ一撃ヲ加エ、太平洋ノ防波堤トシテ『サイパン』島ニ骨ヲ埋メントス。戦陣訓ニ曰ク『生キテ虜囚ノ辱ヲ受ケズ』、『勇躍全力ヲ尽シ、従容トシテ悠久ノ大義ニ生クルコトヲ悦ビトスベシ』ト。茲ニ将兵ト共ニ聖寿ノ無窮、皇国ノ弥栄ヲ祈念スベク敵ヲ索メテ発進ス。続ケ」

サイパンの攻防戦で日本軍の死者は、41,200人。日本軍総勢で43,600人であったので、そのうちの実に95％が戦死したと数えられる。兵と一緒に行動したため殺されたり、集団で自決した民間人は、12,000人。対してアメリカ軍全体の死者は3,400人であり、先住民チャモロ人・カロリアナ人の死者は419人であった。

1944年７月19日に日本兵の日記が焼け跡から発見された。誉部隊119439　43の医療部隊　川口鱈男の日記であった。(8)

1944年７月７日

ズブ濡れの体で震えているとき、前進の命令が下った。北方の暁の空を見つめながら、皇居の方角に恭しく敬礼し、両親や叔母、女房には厳粛な気持ちで最善を尽くすと誓った。長谷川分隊長と渡辺伍長が岩陰を離れジャングルから出てきた。一昨日来敵の砲火による集中攻撃が断崖に近づいてきたとき、山口中尉と死ぬ場所は同じだと約束したのに、分かれたのは残念だった。海岸に出ようとしたが、断崖のために果たせなかった。周囲を敵に完全に包囲され、ジャングルに身を隠すよりほかに為す術がなかった。夜明けとともに、下の道路では車両や戦車や歩兵などにより、敵の活動が始まった。とうとう終わりがきた。私たちは長谷川分隊長と輸送班からなる第２部隊の指揮官や兵士たちと別れたが、私たちの班は10人にも満たなかった。攻撃しようにも、武器がなかった。天皇のために死ぬ覚悟で、形見を整えながら時を過ごした。振り返ってみると、私はまだ26才だった。天皇のおかげで両親も叔母も私も、今日まで生きてこられたことに深く感謝した。だけども 非常に残念だったのは、花びらのようにはかなく散って土に帰ろうとしているとき、形見になるようなものが何もなかったことだ。敵の上陸以来、己の義務を果たし軍神になろうとあらん限りで敵と戦えたのはとても幸せだった。ただし力及ばず、鬼畜米兵に皇国の土を蹂躙させてしまったのが残念だ。私はこの体を捧げて太平洋の白波となり、味方の軍がやってきて皇国の土地を取り返すまで、この島に留まるつもりだ。

親愛なる恵子殿、力強く生きてください。お母さんも弟も本当にありがとう。弟よ、家族と叔母を宜しく頼む。私の仇を取ってください。澄子を宜しくお願い致します。妹も元気でいて欲しい。

澄子様、たとえこの南の島で朽ちようとも、この場所を守ります。

親愛なる叔母様、あなたの親切には感謝します。ご恩に報いられず残念です。澄子を宜しくお願いします。

さようなら。

1944年７月７日

日華事変の７周年目に死ぬことができて嬉しく思います。敵を殲滅し皇国の勝利を確信致します。

1944年８月には、サイパンは完全にアメリカ軍の支配下におかれた。そして現在のサイパン国際空港（日本領ではアスリート飛行場を呼ばれていた）に滑走路を整備拡張し、1944年11月24日Ｂ29、94機による東京への空襲（正式には1942年にＢ25、16機による初空襲があったが、東京での被害は軽微であった）1945年３月10日Ｂ29、334機（グアムからも出発）による東京大空襲、そして８月６日サイパン島の隣のテニアン島から出発したＢ29エノラ・ゲイ号による広島原爆投下と続くことになった。なぜテニアン島から、出発したのかは疑問が残るところであるが、テニアン島とサイパン島は兄弟のような関係でごくごく近い距離に位置している。なぜ、Ｂ29の中心基地であったサイパン島から出発しなかったのかという理由は、「多分、事故で暴発したり、搭載機エノラ・ゲイが離陸に失敗した場合等を考慮し、グアム・サイパンより、小さな犠牲で済むであろうとの推測からそうなった可能性が強い。」(9)とあり、やはり空襲の主体はサイパンであった。

サイパンはアメリカに占領されたが、一部の兵と民間人が、ジャングルの中で抵抗を続けていった。1945年８月の日本の敗戦のあとも、大場栄大尉を中心とする勢力の抵抗活動は続き、大場は、巧みにアメリカ軍の目を逃れ、逆にゲリラ戦術でアメリカ兵を悩ませたので、フォックスと呼ばれ、アメリカ軍から恐れられた。映画『太平洋の奇跡　フォックスと呼ばれた男 』(10)で紹介されたので、有名になったが、敗戦の昭和20年12月１日まで降伏しなかった。敗戦より４カ月後にようやく日本の武装勢力は一掃され、日本人は皆収容所に入れられ、後に本国日本に帰国した。1947年国連の信託統治領となり、実質アメリカの統治下に入った。

Ⅳ. 発問を考える

授業は、生徒にどのような発問をして、その反応（回答や活動）をどう予測し、展開するかである。ここでは、サイパンの授業の展開に即した発問と反応予測を考えて、補足の資料や説明を考えてみる。まず発問を、知識の理解だけをめざすのではなく概念や大きな観点で考える大問と、具体的な点について考える小問とに分類して、提示してみる。

大問１「負けるとわかっていても、なぜがんばったのか？」

小問１「なぜ、最高司令官たちは、自決してしまったのか？」

小問２「なぜ日記を書くのか？」

小問３「川口鱈男の日記で、なぜ非常に残念だったと思ったのか？」

小問４「同じ日付の日記があるのか？」

大問２「なぜ集団自決をしたのか？」

大問３「玉砕と言いながら、なぜ降伏したのか？」

大問４「このサイパンでの戦闘を、どう考える？」

と以上大問４つと小問４つに分類した。

次に発問とそれに伴う反応予測を考えて、補足の資料や説明を加えてみる。生徒が考えるであろう反応（答え）を、箇条書きの形にしてまとめてみた。また補足の資料や説明については、⇨の形で記してててみた。

大問１「負けるとわかっていても、なぜがんばったのか？」

・連合艦隊が必ずたすけに来るという考えを強く持っていたから、がんばれた。

・アメリカ軍に捕まると、男は拷問の上で殺され、女が乱暴の上殺されると教育されていたから、死に物狂いでがんばれたのだ。

・戦陣訓の『生キテ虜囚ノ辱ヲ受ケズ、勇躍全力ヲ尽シ、従容トシテ悠久ノ大義ニ生クルコトヲ悦ビトスベシ』は、兵士に浸透していたからだ。

⇨かつて授業で、この戦陣訓をどう思うかを問うたことがあるが、生徒の多くが「元気のいい時は、これを否定することはできないけど、本当に捕虜になったら、そうも言ってられない」と発言していた。戦争を生きるか死ぬかの二者選択の形なら、こうした論理も通じるが、実際は生きると死ぬの間が、存在することを生徒は改めて考えてしまったのだ。また、戦陣訓を作った方の論理を考えさせると、「捕虜になると拷問が待っている」という最初の考えが、なぜ拷問されるのか問うことによって、「捕虜になると、情報が敵にもれるから」という答えに行き着き、そこでこの戦陣訓の怖さをもう一度気付くことになった。

小問１「なぜ、最高司令官たちは、自決してしまったのか？」

・兵士の士気を高めるため。

⇨「高まったか？」を問いたい。指揮官として先に死んでいくことより、最後まで勇敢に戦った方が、兵士の士気を高めるのにつながるのではないかと考えさせたい。責任者の責任の取り方について生徒たちに考えさせたいのである。

小問２「なぜ日記を書くのか？」

この問いは、正確には「川口鱈男の日記が残っていたけど、戦争中の日記はよくあるけど、なぜ日記を書くのか？」と授業では問う。

・日記は当時はみんなよく書いていたから、自然なのではないか。

・日記は、自分の気持ちを静める効果があり、客観的に自分を見つめたいから。

・だれかに読んでもらいたい。

⇨この場合のだれかを問うことにしたい。読んでもらえる可能性が極めて低い状態でも、書かざるを得ない心理状態を意識させたいのだ。

小問３「川口鱈男の日記で、なぜ非常に残念だったと思ったのか？」

・形見がないことが悔しい。自分という存在を忘れないで欲しい。

⇨この地で死ぬことを悔やんでないように、日記には見れるが、実は割り切れない気持ちの揺れを、生徒に感じさせたい。そして共感できる点をさがしていく。

小問４「同じ日付の日記があるのか？」

・思い出したように書いたのではないか。

・なごり惜しい。

・前の文の最後が女々しくなった。もっと雄々しく勇気があるのだと思いたい。

⇨ここでも、心の揺れを意識させたい。長い文章を書いていくに従って、本音が吐露してしまうことを、それではいけないと引き戻す心の葛藤を感じさせたい。

大問２「なぜ集団自決をしたのか？」

バンザイクリフ、スーサイドクリフなどの映像を見せながら、考えさせたい。

・がんばった理由と同じで、アメリカ軍に捕まると、男は拷問の上で殺され、女が乱暴の上殺されると教育されていたから。

・戦陣訓の『生キテ虜囚ノ辱ヲ受ケズ、勇躍全力ヲ尽シ、従容トシテ悠久ノ大義ニ生クルコトヲ悦ビトスベシ』を実行したから。

⇨これは、戦陣訓であって、兵士に向かって言っていたのに、なぜ民間人もこれに従ったのかを問いたい。そこに、1944年７月６日の南雲忠一、斎藤義次ら陸海軍の最高指導者の最後の訓示を思い起こせたい。兵と行動を一緒にした民間人は、この戦陣訓を自らにも課していくように心定めてしまったことを意識させたい。

自決については、集団自決だけでなく、自決そのものをやめさせようと努力したのは、他ならぬアメリカ軍の兵士であったことは、日本軍とアメリカ軍の体質の違いを考える材料となる。また、アメリカ軍では、戦場では誰でも恐怖心を抱くものであるということを教えていた。次の資料は、戦闘の恐怖に関する調査結果として18―19才の新兵の教育材料の資料として使用されたものである。

「戦場に赴くとき、自分は殺されるのではないかとうい不安感に駆られる。傷つき苦しんだり、その時どうしたらよいのだろうか、などと思うだろう。怖くないなどというのは本音ではない。怖がったと言っても臆病者でもなんでもない。」

この調査（1944年版陸軍省パンフレット21―13より）は2,095名の退役軍人の経験に基づいて実施され、戦闘中の恐怖で右のような症状が出たことを明らかにしている。(11)

激しい動悸	84%
恐怖による虚脱感	69%
身震い、おののき	61%
冷や汗	56%
吐き気	55%
めまい、卒倒	49%
硬直感	45%
嘔吐	27%
下痢	21%
失禁	10%

大問３「玉砕と言いながら、なぜ降伏したのか？」

サイパン中央部のススペ収容所には、日本人10,424人が収容されていた。チャモロ人・カロリアナ人2,525人、朝鮮人1,300人(12)と比べて多い人数であり、捕虜になった日本人の中には、民間人ではなく兵士も少なからずいた。アメリカ軍の二世兵士の言葉に、民間人である斎藤貞三はいたく傷ついた。それは「あなたたち　にほんじんは　まけると　ほんとに　よわい」(13)これは捕虜になることを考えてもいなかった人たちが、見せた反応であった。どのように対応していけばよいかわからなかったというのが事実であろう。だから収容所で仕事ができると、俄然嬉々として働き始め、アメリカ本土に帰る兵隊にみやげものを作って売ったなどのことをした。パラシュート生地のオカッパ頭の姉様人形が大変よく売れたとの記録がある。(14)

大場栄大尉たちは、なぜ抵抗を止めて、降伏してきたのかは、少し説明を加える。彼らは日本が敗戦したことを受け入れることが難しかった。神国日本の教育は、敗戦という言葉を用意していなかった。それ

に対しアメリカ軍は、荒廃した日本の姿、銀座の様子などの写真を空からビラとしてまき、これを事実として受け入れるためには、大場は敵にも味方にも秘密に収容所の日本人に確認を取っていった。大場自身は敗戦を認めていたかもしれない。しかしこれでも降伏をするという選択肢はなかった。それを降伏への道をつけてくれたのは、やはり軍の命令であった。パカン島にいた天羽馬八少将より命令書であった。

一つ――。昭和20年９月２日、日本国政府は、天皇陛下の直接御命令により、陛下御勅許の代表を通じ、連合軍最高司令官元帥ダグラス・マッカーサーに無条件降伏せり

二つ――。先任将校として、本官は茲に以上の点に基づき貴下、貴下諸君に、マリアナ群島サイパン島司令官アメリカ海軍少将フランシス・Ｆ・Ｍ・ワイテングの任命せる代表に無条件降伏すべく命令す。パカン島最高司令官、陸軍少将天羽馬八(15)

こうして、大場は、1945年12月１日に、アメリカ軍に降伏した。生徒に考えてもらいたいことは、降伏でさえも、命令がなければ、動けない日本の兵士たちの姿である。戦後20年も経って、フィリピンで見つかった横井庄一の「はずかしながら、帰ってまいりました。」と言う言葉を理解できるのではないかと思われる。

こうした戦争の敗戦を受け入れられない思いは、戦後でも続いていた。1946年１月５日に、収容所内で、殺人事件が起こった。アメリカ軍の通訳やアメリカ軍と日本人との仲介をしていた者に対しての事件であった。(16)いわゆる勝ち組負け組の対立事件で、世界中とくにブラジルなどでは有名であり、戦後しばらく続いた。サイパンの人々にも、簡単には、切り換えられなかった心情の問題であった。

大問４「このサイパンでの戦闘を、どう考える？」

⇨この問は、戦争の発問の究極的な発問である。答え（反応）は少なく、難しい。ここでは答えをしっかりさせるさとを期待するのではなく、考える切っ掛けとしていくことに意義ある。この発問は言葉を換えて言えば、「戦争をどう考える」と言うことになる。戦争の授業に一貫して流れる大きな発問であり、中学生では答えが出せない、生涯にわたる継続的な問いなのである。授業中でなくても、ノートに感想を書かせるなどの方策を取るのも、しっかりと考える道筋をつけるかも知れない。

Ⅵ. 成果と課題、展望「これからのサイパンと日本の関係」

サイパンを教材にしようとの考えは、太平洋戦争の授業をするたびに、考えてきた。東京大空襲の授業では、アメリカのビデオフィルムを使用することが多いが、そこにはサイパン攻防戦、バンザイクリフで自決する母親、飛び立つＢ29などのサイパンの様子が描かれていた。そして現地に取材に行って、初めてその意義・意味をとらえなおした。やはりサイパンの授業をしっかりすべきだと確信し、本稿の冒頭にそれを書いた。映像などもしっかり残っているので、日本の中学生にも理解できる内容を、英語を交えて提示することができる。

しかし本稿は、授業実践をふまえたものではなかったのが、残念であった。今後は実践をふまえた内容として、教材化を図りたい。

現在、サイパンはアメリカ合衆国の領土ではなく、1986年に承認された自治領として存続している。これはプエルトリコと同様にアメリカの保護領であり、内政は自治権を認められるが、国防・外交権は、アメリカにあるというもので、サイパン島を含む北マリアナ諸島は正式には、「北マリアナ諸島自治政府（ＣＮＭＩ）」という名称となっている。冷戦以後、アメリカの軍事基地としての戦略的価値は相対的に低下しており、グアム一極集中により、軍事費を減らそうというのは時代の風潮である。

1970年、80年代には、日本の経済成長に乗って、日本のリゾート産業がこぞって開発を進めたが、バブル景気以降、撤退が相次ぎ、産業らしい産業は見当たらない。あえて言えば観光産業であり、ゴルフやマリンスポーツが中心となっている状況である。現在では日本人より、中国人や韓国人の方が多く訪れている実際の姿である。

しかし、サイパンの歴史を見ればわかるように、現地のチャモロ人・カロリアナ人との関係(17)など、日

本のサイパンの位置づけは高く、それだけ責任も重いものがある。今後、サイパンと日本とがどのような関係を築いていくかは、他の南太平洋の島々との関係発展を図れるかのモデルともなる。

註

(1)『Saipan in Flames JUNE,1944,INVASION(サイパン燃ゆ 1944年6月の侵攻)』
William H Stewart　p.7

(2)『日本領サイパン島の一万日』野村進　2005年　岩波書店　p.64

(3)『日本領サイパン島の一万日』野村進　2005年　岩波書店　p.127

(4)『日本領サイパン島の一万日』野村進　2005年　岩波書店　p.186

(5)『日本領サイパン島の一万日』野村進　2005年　岩波書店　p.188

(6)『太平洋戦争』家永三郎　2002年(岩波現代文庫)などの多数の文献

(7)『日本領サイパン島の一万日』野村進　2005年　岩波書店　p.206

(8)『Saipan in Flames JUNE,1944,INVASION(サイパン燃ゆ 1944年6月の侵攻)』
William H Stewart　p.18

(9)『Saipan in Flames JUNE,1944,INVASION(サイパン燃ゆ 1944年6月の侵攻)』
William H Stewart　p.57

(10)映画をノベライズしたものとして『太平洋の奇跡　フォックスと呼ばれた男』
大石直紀　2011年 小学館

(11)『Saipan in Flames JUNE,1944,INVASION(サイパン燃ゆ 1944年6月の侵攻)』
William H Stewart　p.29

(12)『米海兵隊公刊戦史』(『日本領サイパン島の一万日』野村進　2005年　岩波書店　p.307)

(13)『日本領サイパン島の一万日』野村進　2005年　岩波書店　p.335

(14)『日本領サイパン島の一万日』野村進　2005年　岩波書店　p.339

(15)『太平洋の奇跡　フォックスと呼ばれた男』大石直紀　2011年 小学館　p.238

(16)『日本領サイパン島の一万日』野村進　2005年　岩波書店　p.1

(17)「戦前は日本人とサイパンの人は仲良くしていた」グレゴリオ・(ゴロー)・カブレラ
Journal of Pacific Society（太平洋学会誌）第55-56号 1992年

その他 参考文献

・『サンパン　テニアン戦跡完全ガイド　玉砕と自決の島を歩く』小西誠　2011年
社会批評社

・ＤＶＤ　PACIFIC:THE LOST EVIDENCE:SAIPAN